

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

保護者支援の事例紹介

事例1 保護者の最初のハードルは障害が発見されたとき

- ・周囲の子どもとトラブルが多いこともあり、「毎日のように幼稚園からかかってくる電話が怖かった」と話していたお母さんがいました。園行事に参加すると、周りの保護者から責められているような気がして、「とても孤独で辛かった」と涙ながらに教えてくれました。
- ・幼稚園から勧められて医療機関を受診したのですが、子どもの診断名を受け入れられず「なぜうちの子が、そんなはずはない」という怒りと悲しみで、周りが見えなかったそうです。しかし、「夫と一緒に発達障害の勉強をしよう」と言ってくれたこと、園や家庭で支援をすれば子どもが伸びることを実感できるようになってから、少しずつ前向きに生きようと思ったそうです。

保護者が診断名を納得することで、支援がスタートします。

事例2 遠回りこそ、最良の近道になる

- ・幼稚園では言葉の遅れや集団活動に参加できないために、気に掛けていた子どもがいました。保健師の勧めで4歳頃から医療機関とつながっていて定期的に発達検査をしていましたが、保護者は検査結果を詳しく担任に伝えようとしませんでした。園では焦らず保護者と信頼関係を築くことからスタートしようと考え、ホッとするような言葉を掛けたり、子どものよいところを伝えたりして、保護者が心を開くまで時間をかけました。
- ・小学校入学にあたり、保護者はみんなと一緒に勉強ができる学級を選びました。入学してから2か月後、保護者から「うちの子を個別指導ができる学級へ変えてください」とお願いしたそうです。

幼稚園で焦らずありのままの様子を伝えていたことが、保護者の子ども理解につながりました。

事例3 子どもの変容が祖父母の理解につながる

- ・検査結果から発達のアンバランスが認められた子どもがいました。母親は離婚したことが原因ではないかと自分自身を責めていました。また、一緒に暮らしている祖父母からは、「あなたの育て方が悪いからだ」と言われ、精神的に追い込まれていました。
- ・母親は視覚優位を生かした指導を通して読み書きが定着するならばと、祖父母に内緒で通級指導教室の利用を決めました。喜んで通級指導教室に通う孫の姿と、育児と仕事に奮闘する娘の姿に、祖父母にも少しずつ変化が見られるようになりました。

祖父母に子どもの特性を理解してもらうためには時間がかかるので、まずは保護者を支えましょう。

事例4 「甘えさせる」と「甘やかす」の違いは？

- ・下の子が生まれたり、小学校入学が近付いたりすると、保護者は「お兄さんだから一人でやりなさい」「たくさん字を覚えないとダメでしょう」など、急にハードルを上げようとします。その結果、子どもは指しゃぶり、チック、吃音、場面緘黙などのストレス信号を出します。
- ・子どもが甘えてきたときは、いくらでも甘えさせればいいんです。十分に甘えさせていると、子どもは「自分は大切にされている」という安心感と、「一人でやってみよう」という意欲が生まれます。



甘えさせる→子どもの都合を優先して可愛がること 甘やかす→親の都合を優先させて可愛がること

「いい子だから可愛がるのではなく、可愛がられた子がいい子になるんです！」

事例5 診断名よりも具体的な困り感を伝える

- ・就学前からAさんには診断名が付いていました。Aさんには幼稚園の頃から仲良しの友達がいいて、小学校入学後もその関係は続いていました。ある日、Aさんの保護者は、仲良しの友達の保護者にAさんの診断名を伝えました。すると、自分の子どもに「もうAさんとは遊ばないように」と話したそうです。Aさんの保護者の思いとは反対の結果になってしまいました。

診断名ではなく、具体的な困り感と手立てを伝えることが理解につながります。